

# 小学校4年 考える力を高め、心を育てる放送教育

草加市立栄小学校 内山 真実

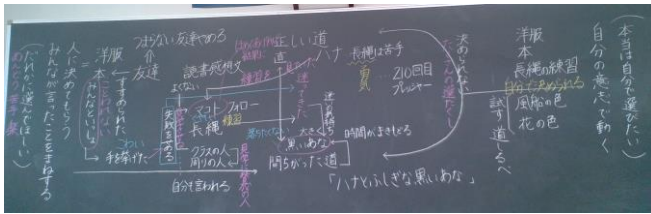
## 【実践報告の概要】

放送教育には、子どもたちの考えを引き出す力がある。その力と「空発問」（子どもの思いを引き出す発問）を生かして、授業を行った。本実践では、「特別の教科 道徳」において番組視聴後、子どもたち一人一人の発言を板書上で結び付け、多種多様な考えに触れさせるようにした。そうすることで、自分の思いや考えが板書に位置付けられていくとともに、友達の発言とつながることによっても、大切なことが何かを考えられるようにした。

## 【取組の具体】

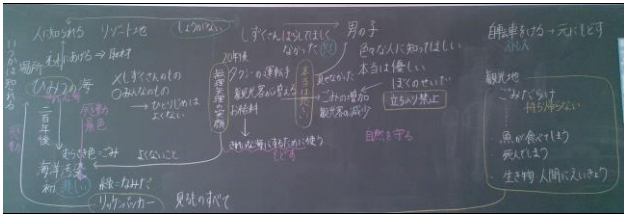
### 話し合い・構造的な板書による思考の高まり

#### ○『もやも屋』ハナとふしぎな黒いあな



- ・3つの内容に焦点化（友達の提案を断れない場面・クラスの子が責められているところで自分の考えを言えない場面・自分の意思で動く大切さと決めることの難しさについて）され、話し合いが進んだ。
- ・何かを決めるときに「特に必要なことはない」と考えていた児童が、話し合い後の振り返りでは「勇気を出して、友達の意見に流されずに自分の意見を言いたい」と記述した。

#### ○『もやも屋』ひみつの海



- ・2つの内容に焦点化（ひみつの海が色々な人に知られてしまった場面・ひみつの海が変わってしまった場面）され、話し合いが進んだ。

### 事前・事後アンケートの活用

- 内容に関連して事前に「自分が大切にしているもの」を聞き、事後には、「この学習を通して大切だと思ったこと」やその理由を聞いた。

## 【活用番組と実践者による番組分析】

### 活用番組 道徳『もやも屋』

- 登場人物が迷ったまま終わったり、状況が謎のままだったりなど、子どもたちにとって消化不良の状態を終了するため、話したいという意欲を高める構成や内容になっている。
- 道徳的価値の内容項目の様々な要素が番組の中に入っている。子どもたちは自分の考えや経験に合わせて様々な視点から、発言することができるため、自然と多面的・多角的な話し合いとなる。
- 学級の実態に合わせて、放送順に関係なく内容を選ぶことができる。

## 【本実践における工夫点】

### 自由に思考させる視聴・発問

番組の事前情報を与えずそのまま視聴させた。思考の方向性のルールを敷かないことで、教師の意図を感じさせず、子どもの思考をそのまま学習の場に表立たせるためである。結論は一つでない上、正解があるわけでもない。空発問により、子どもたちから沸き起こった思いを受け止め、学級の話し合いを進めていった。

### 構造的な板書

子どもたちの発言の意図や思いを受け止め、板書に位置付けていく。その際、対立することや関連することを矢印で繋いだり、囲んだり、色で分けたりして、板書に表した。

### アンケートによる児童理解

事前アンケートから、学習前の学級の実態を捉えるとともに、事後アンケートと比較し、子ども一人一人の考えの変化を捉えられるようにした。

## 【本実践の成果と課題】

- 「番組を視聴すると、話したいことが浮ぶ」と、8割以上（33人中27人）の子が回答し、番組活用によって子どもたちが自分の思いや考えをそのまま話すことや話し合いたいという意欲の向上につながった。
- 番組視聴を続けていく中で、発言する子が増え、9割以上（33人中31人）の子が友達の発言や板書から自分の考えが見つかったり、新たな考えが生まれたりすると感じると答えた。
- 道徳を学習するときの姿勢について、以前と比べて「友達の考えを参考にするようになった。」「自分だったらどうするか考えるようになった。」「発言が多くできるようになった。」と自分の成長を実感していた。
- △子ども一人一人の思いがさらに学級の中で生かせるよう、事前・事後のアンケートから児童理解を深め、日々の授業作りに取り組んでいく。